

公認会計士制度の論点メモ

1. 現在の問題

- 公認会計士のあるべき姿と監査法人のあるべき姿を分けて議論すべき
 - ・資本市場がグローバル化する中で、国際競争という観点からも論じるべき
 - ・国内市場のみを前提とした制度ではなく、グローバル競争の中での経済・資本市場の在り方と公認会計士、監査法人が果たすべき社会的役割を議論した制度とすべき。

- 公認会計士のあるべき姿：国際競争に打ち勝つ人材養成という視点
 - ・公認会計士＝監査人という固定概念を払拭する必要
 - －昭和 23 年の立法後、公認会計士及び監査法人の社会的役割および取り巻く経済環境は大きく変化
 - －優秀な会計監査人を育成するためには監査業務の経験が必要不可欠だが、一方で、監査だけの経験しかない公認会計士は視野が狭く、ビジネスセンスが不十分な傾向があるとの指摘もあり、かえって資本市場全体で見ると国際競争の中で孤立するおそれあり。さらなる未就職者も生む可能性。
 - －監査は公認会計士の基本的業務であるが、監査が非監査業務や保証業務より優位する概念ではない。むしろ、監査業務より、非監査業務の方が報酬単価は高い。
 - －グローバルな資本市場で国際競争に打ち勝つため、非監査業務にも従事する公認会計士を国家戦略として育成すべき。

 - ・国際市場の中で日本の優位性を確保することを目指す
 - －監査法人そのものの統治のあり方が問われ始めている
 - －中国では（ビッグ 4 ではない）独自の監査法人を擁立する動き
 - －資本市場の競争優位性を I F R S が左右する可能性
 - －監査基準も国際監査基準（I S A）に統合されると、監査法人自体が国際競争にさらされる可能性

 - ・監査だけでなく、高品質の非監査業務をも提供することで、企業にとっての医者（診断＋治療）のような存在であるべき。単なる批判的機能だけでは、結果として、競争優位性を喪失。（米国エンロン事件における背景と日本の事情は全く異なる）

 - ・リクルートという短期的視点だけではなく、広く最終的な人材の在り方を再検討することが必要。
 - －国際競争力のある経済資本市場を形成するために、如何なる会計監査制度であるべきか、という観点からの検討が必要。
 - －短期的な就職問題に即応した制度設計ではなく、あるべき会計プロフェッショナルとその育成方法について現実を直視した検討が必要。

- 就職という観点からだけではなく、多くの人材を雇用する、監査法人や企業・役所等の関係者から必要とされる人材のあるべき姿を明確にし、それに合わせた試験制度に再構築し直すよう再検討を行う。

○監査法人のあるべき姿：アカウンティングファームへ

- ・ 欧米・中国と対等な関係を維持していくためにも、諸外国の制度の分析を徹底することが必要
 - 諸外国と比較して、我が国の監査法人は会計監査に特化を前提
 - 諸外国と比較すると中途半端な制度（厳格と緩和が曖昧）
- ・ 非監査業務などの業務提供範囲を広げ、欧米諸国のアカウンティングファームと対等な法人を育成することが、企業の国際競争力を高める。
 - 日本の監査法人は業務に制約があるため、十分な実務経験を経た優秀な人材が必ずしも育ちにくい環境。

2. 今後議論すべき点

○今後の公認会計士に期待される姿：経済社会のガバナンスの一翼たる存在

- ・ 必要な素養
 - 会計士の専門性、職業倫理規範、バランス感覚
 - 会計の背後にある基礎知識（経済学、経営学）
 - 実務経験（ビジネスセンス、対応力、人間力）
- ・ このうち試験制度に期待されるもの
 - ビジネス感覚の前提となる教養教育（教養課程の修了を前提）
＜ 職業倫理規範として最低限大学の一般教養課程は必要不可欠＞
 - 専門性に関する基礎知識
 - 最低限の実務経験とビジネス感覚

○今後の監査法人に期待される姿

- ・ グローバル競争の一翼を担える人材育成と組織運営
 - 監査法人が、海外からの教育方法にのみ偏重せず、日本としてあるべき会計人材を育成に注力するとの見地から、より魅力的な教育プログラムの策定が不可欠。
 - 監査法人内における人事制度改革（インセンティブを与える設計）
＜現在は掛け声倒れで、単なる年功序列で運営されており、優秀な人材が育ちにくい土壌との指摘あり。＞
 - 国際社会に通用するリーダーを育成するためにも、実務経験の中で、専門教育に偏重しない人格形成を目的とした育成についても検討が必要。
- ・ 非監査業務など二項業務の定義拡大
 - ただし、実質的な独立性についての実効性確保

○将来的な制度改革：社会の期待に応えうる「公認会計士」の養成

- 税理士資格も含めた抜本見直しも視野

一般企業への就職・
コンサルティング業務
等多様な業務領域へ

税理士等の関連資格

Point

監査法人として期待されることと、
会計プロフェッショナルとして個人
に期待されることを分ける

公認会計士の在るべき姿

【社会からの期待】

- ・ バランス感覚
- ・ 会計の専門性(税務・財務)
- ・ 職業倫理規範

【社会の変化に対する素養】

- ✓ 経済学
- ✓ 経営学
- ✓ IT
- ✓ ビジネスセンス
- ✓ リスクマネジメント

監査法人の在るべき姿

【社会からの期待】

- ・ 独立性(独占的業務を付与される根拠)
- ・ 専門性(拡張概念)
- ・ 規模(独立性+専門性)
- 法人としての職業倫理観(一般規範性)

- ✓ 証券市場のガバナンス機能として果たすべき役割という観点
- ✓ グローバルな視点からの円滑な資本調達の実現と企業の国際競争力を高めていくために必要なインフラとしての観点

VS

税理士

VS

会計事務所・個人事務所

- ・ 税務
- ・ 中小企業の保護育成

注)税務事務所を兼ねる

Point

会計の前提を理解するためにも、
一般的な素養を幅広く持つことは
不可欠